戦後世代の語り部育成事業を終えて

次世代の語り部事業担当
坂尻麻子

1. はじめに

戦後70年の節目となる平成27年（2015）夏、厚生労働省（以下「厚労省」という）は、戦後世代が戦争体験者からその体験を聞き取り、後世に伝える「伝承者」の育成事業を始める方針を固めた。地上戦があった沖縄、被爆地の広島・長崎では既に実施されていたが、国として「記憶」の継承に踏み出した。（戦争体験「伝承者」育てる．読売新聞．2015-08-07，夕刊，p.1.）

総務省統計局の令和４年（2022）10月1日現在の人口推計によると、戦後生まれの人口は1億874万5千人で全体の約87％を占める。太平洋戦争が始まった昭和16年（1941）に小学校（当時は国民学校）に入学した方は、90歳である。

こうした時代背景をふまえて、昭和館では、平成28年に厚労省からの委託を受けて戦後世代の語り部育成事業を開始した。厚労省所管のしょうけい館（戦傷病者史料館）、首都圏中国帰国者支援・交流センターにおいても同時に開始された。

令和４年に最後の研修生となる３期生が研修を修了し、委嘱審査会を経て講話活動を開始したことに伴い、本稿にて育成事業を中心に振り返る。

2. 研修生の募集と選考

研修生は、１期生から３期生まで、定員は各期約10人、次の①②を対象者として募集された（写真1）。

①戦中・戦後の労苦の継承に深い関心と理解があり、戦後に生まれた方で労苦体験を伝承する語り部として次の世代にその労苦を伝える意欲がある方
②研修に継続して参加可能であり、かつ研修終了後継続的に、語り部として活動可能な方

応募者数は、１期生は54名、２期生は26名、３期生は24名であった（図表1）。

研修生	募集時期	応募者数
１期生	平成28年　8月上旬～9月上旬	54人
２期生	平成29年　6月下旬～8月上旬	26人
３期生	平成30年　6月下旬～8月上旬	24人

図表１　研修生の応募状況など

写真１　１期生募集のポスター

第１次選考は応募書類及び小論文による書類審査が行われ、小論文のテーマは「昭和館を通して次の世代に対して何を伝えるべきか」であった。第２次は面接による選考が行われた。

選考の結果、１期生は11名、２期生は８名、３期生は９名の研修生が選出された。各期の年齢層は20代から60代と幅広く（図表2）、属性も読書アドバイザーや朗読・演劇経験者、気象予報士、元教員、学習塾運営者等々、多様であった。

年 齢 層	１期生	２期生	３期生	合　計	割　合
20代	0人	3人	2人	5人	18%
30代	5人	2人	2人	9人	32%
40代	3人	0人	2人	5人	18%
50代	3人	2人	3人	8人	29%
60代	0人	1人	0人	1人	3%
合　計	11人	8人	9人	28人	100%

図表２　年代別研修生数（応募時の年齢による）

3. 研修概要

平成28年（2016）10月16日に昭和館、しょうけい館、首都圏中国帰国者支援・交流センターの３施設合同で１期生の開講式が開催され（写真2）、同日に第１回研修を実施した（写真3）。

次に示す①～⑤の目標を設定し、研修は月１回、３年間として実施した。

①事実関係に基づいて常設展示室の解説ができるようになること、並行して展示について補足する情報を自分なりに学習すること。
②昭和館の図書室、映像・音響室を利用して、解説の裏付けとなる資料を活用し事実関係を習得すること。
③事実、出来事については、可能な限り様々な見解を多面的に収集、吸収し、昭和館の次世代の語り部として公正中立な見解を選択していくこと。
④一面的な知識に偏らないよう、公正中立な立場について研修生間で意見交換などをしながら習得すること。
⑤最終的に自分の興味のあるテーマを設定し、30分程度の講話原稿を作成すること。

１年目は基礎的な知識を習得する研修を行った。外部専門講師による講義では、戦中・戦後の諸相や社会経済史などについて学んだ。さらに、常設展示室のブーステーマである「家族の別れ」「家族への想い」「昭和10年頃の家庭」「統制下の暮らし」「戦中の学童・学徒」「銃後の備えと空襲」「空襲への備え」「昭和20年8月15日（終戦）」「廃墟からの出発」「遺された家族」「子どもたちの戦後」「復興に向けて」について昭和館職員が解説し、学びを深めるための補足資料として、関連する所蔵資料（文献、写真、映像、体験者の証言映像など）の情報提供を行った。

２年目と３年目の前半は、都内や地方の戦跡、施設をめぐり、戦中・戦後の事象や被害状況などを後世に残していくための取り組みについて考察したり、広島被爆体験伝承者の講話を聴いたり、戦争体験者との交流を繰り返しながら理解を深めた。新型コロナウイルス感染拡大時には、研修の

写真２　３施設合同で開催された1期生の開講式

写真３　第１回研修で昭和館の展示を学ぶ1期生

中止を余儀なくされることもあったが、オンラインや昭和館が制作したオーラルヒストリー（証言映像）を活用するなどして研修を行った（写真4）。

また、より伝わりやすい講話に向けて、元アナウンサーを講師として招き、正しい発声・発音や調音、抑揚などの技術的な指導も受けた（写真5）。

3年目の後半からは、講話原稿の作成に取り組み、実演練習などを繰り返した。

写真４　研修の様子

写真５　話法研修の様子

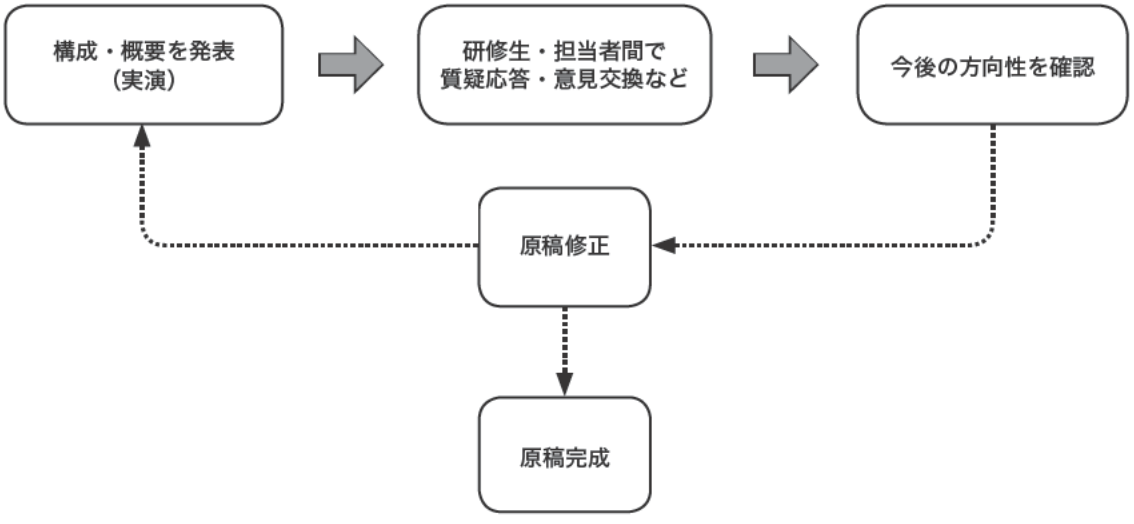
4. 講話原稿の作成

次世代の語り部の講話は、講話原稿をもとに話をするスタイルである。原稿のテーマは、昭和館事業の柱である「戦中・戦後の国民生活上の労苦」に基づき、自身が関心のあるテーマを掘り下げ、次世代に継承したい体験談などから設定した。

原稿は、小学校の授業１コマ分を想定して30分程度の長さとし、講話の対象者、例えば小学校高学年から中学生、大学生、一般人などを設定して作成した。

戦争そのものの是非を問うなど、特定の主義、主張、持論を展開するのではなく、当時の人々の労苦や想いを次世代に語り継いでいくという当館事業の趣旨をふまえて、研修生同士で意見交換を重ねながら作成を進め、原稿の完成をもって研修修了とした（図表3）。

２、３期生は、先に活動を開始した１期生の講話の様子を鑑みて、当時の実物資料や写真、体験者が描いた絵などの視覚的要素を多く取り入れることとした。



図表3　原稿完成までの流れ

写真６　第１期生の修了式

5. 委嘱審査

館内で「昭和館における戦中・戦後の労苦を伝える次世代の語り部委嘱審査会」を設置し、研修を修了した者を対象として、研修の理解度、講話技術、講話原稿を勘案して、次世代の語り部としてふさわしい者を選出した。

講話原稿については、昭和館に則した内容か、簡潔で分かりやすい表現をしているか、歴史的事実や時代背景を正確に理解しているか、特定の主義主張が含まれていないかなどの９項目により審査を行った。

6. 活動概要

上記５の審査で合格となり委嘱された者は、委嘱状による館からの依頼をもって講話活動を開始する。委嘱期間は１年間で、期間内の活動状況などにより毎年更新手続を行う。

現在活動している次世代の語り部の年齢構成は30～70歳代で、平均年齢は48歳。最年長は昭和25年（1950）生まれの72歳、最年少は平成３年（1991）生まれの31歳である（令和５年８月10日現在）。講話のテーマは、戦中の学校生活や食糧事情、家族を失った人たちの思いなど、17テーマとなっている（図表4）。

活動内容は、館内で毎月第一日曜日に開催している定期講話会と学校や自治体などからの依頼による講話派遣である（写真7、8）。最近は、昭和館に団体見学で訪れる学校が見学とセットで講話を聴くといったスタイルや、広島や長崎に平和使節団を派遣する自治体が事前学習として活用する事例が増えている。

図表4　講話テーマ一覧

講話テーマ	対　象
「残された家族〜家族を戦争で失くした人たちの思い〜」	小学校5年生から一般
「国策紙芝居で知る銃後の生活」	小学校6年生から一般
「聞こえない人と戦争」	小学生から中学生
「戦災孤児たちの願い〜もしも魔法が使えたら〜」	小学校6年生から中学生
「戦中の小学生」	小学校高学年から中学生
「沖縄の光と影〜今を支える戦争の記憶〜」	小学校高学年から中学生
「学校生活と子どもたち（戦前・戦中編）」	小学校6年生から中高生
「戦時下の中学生〜学生生活と学徒勤労動員〜」	小学校6年生から一般
「ぼくの家にも戦争があった」	小学校中学年から中学生
「軍国少年の戦中・戦後〜終戦時13歳の今吉孝夫さんの体験を中心として〜」	小学校高学年・中学生から一般
「学童疎開〜戦時下の親元を離れての集団生活〜」	小学校高学年
「戦中の子どもの学校生活〜昭和８年生まれの子どもたち〜」	小学校高学年
「空白の3年8か月〜天気予報と戦争〜」	中学生から一般
「軍事郵便を聞く」	中学生から一般
「戦争と学生」	高校生から一般
「熱田空襲下の学徒動員体験記〜航空機製造へ舵を切った愛知時計電機〜」	大学生から一般
「白米が憧れだった頃〜戦中・戦後の人びとの米への強い想い〜」	一般

講話を聴いた方からの感想や意見を一部紹介する。

【小学生】

- 今回の話の内容を深く考え、このようなことが起こらないようにするにはどうしたら良いのかを考えることが大切だと思った。（6年）
- 戦争の事をあまり詳しく知らなかったので、今回の話を聞いて戦争の怖さ、恐ろしさなど、色々な事を知ることができた。（6年）
- 子どもたちも戦争に参加させられていたということを知った。（6年）

【中学生】

- 戦争については一部知っていたが、講話を聴いて、より詳しい当時の状況を知ることができた。今将来の夢を持っていることは幸せなことなので、それを大切にして夢がかなうように今どうするべきか考えたい。（3年）
- 体験談を実際に聞いて恐ろしさや人との繋がり、協力する大切さを改めて知ることができた。（3年）

写真７　ニュースシアターでの定期講話会

写真８　小学校での講話の様子

【教　員】

・時代特有の固有名詞は小学低学年には難しいと感じたが、資料画像や補足の具体的な資料の掲示は子どもたちの興味を引いたと感じた。

・戦争を二度と起こしてはならないことを学ぶと同時に、勉強する意味を見出せない生徒に対して、人生は自分で努力して作り上げるということを学ばせてもらった。

【一　般】

・次世代の取り組みが大変大切だと思った。

・戦争中、なぜ学童疎開が必要だったのか、また実際の疎開体験者の話をもとにしており、具体的で分かりやすかった。

・参加した子どもたちは真剣な表情で講話を聴いていた。地域の当時の様子も盛り込んで話してくれたので身近に感じた。

7. おわりに

新型コロナウイルス感染症が５類感染症へ移行となり、ようやく通常の活動が行えるようになったというのが実感である。そのため、活動の場を広げていくことが喫緊の課題であるが、活動を通して見えてきた課題もある。

現在の講話スタイルは、原稿に忠実な講話であるが、聴く側との対話を取り入れたライブ感が欲しいといった要望も寄せられている。その他、当事者意識や関心をもってもらうための工夫なども求められ、今後は解決に向けた検討が必要である。

先の大戦が「記憶」から「歴史」へと変わりつつある時代をむかえている。当時の資料から歴史的事実を正確にとらえ、人々が経験した戦中・戦後の国民生活上の労苦を伝えることにより、平和について考え、学んでもらい、そこで感じた戦争の惨禍を次世代に継承していく取り組みは益々重要になってくるだろう。